

～幻想蒼日記～チート探索者の幻想入り～

R.H.N

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今から見ると遠い昔、時は第二次世界大戦終結直後、ひよんな出会いをきっかけに、ヤバイ奴等が揃いも揃って幻想郷に凸って来てしまった!!

転生者と見間違う程度のチート能力を持ち、自分達の好きなように動き出す幻想入り者たち。

「え？魔法の森はパンピーには危険だ？」

「え？妖怪の山は人の出入り禁止？」

「え？スキマ妖怪が超強い？」

「でもそんなの関係ねえ！そんなの関係ねえ!!そんなの関係ねえ!!!」

されどもつと幻想郷を蹂躪しかねないこいつらより、更にヤバイ邪神とその仲間たち神話生物の集団までやって来てさあ大変！

幻想郷の明日はどっちだ!!

目次

前日譚	1
「幻想蒼日記」1945/8/15、1946/5/10〜7/15 の記述	9
「葛城」艦上、小さくて大きい真実達	14

前日譚

時は1946年7月15日。

大日本帝国が敗戦し、人員の復員輸送が行われるなか、航空母艦、「葛城」の最期の復員輸送の復路が始まろうとしていた。

この日の輸送は、それまでの南方輸送と違い、中国と本土とをつなぐ輸送経路を担当し、中国から兵士達をのせ、本土へと帰還するところなのであった。

本来、「葛城」は南方復員輸送を担当していたのだが、中国方面の復員が予想外に多く、急途葛城がこちらの方へと向かうこととなったのである。

そんな中、たくさん軍人に乗せた葛城の艦上で、次々と葛城に乗っていく人々を見守る男が一人……

「はあ……やつと葛城による復員輸送もラストか……」

この元空母、現復員輸送艦「葛城」の最期の艦長にして、正規航空母艦、「鳳翔」初代艦長、蒼井 創作（あおい そうさく）である。

「あらよつと……」（ガンツ）

「うわわわっ!?!、艦長脅かさなないてくださいよ……」

「すまんなく、どうしても艦上から艦内経由してワザワザ降りるの面倒なんだよ〜」

彼は平然と葛城の艦板上から飛び降りて港に降り立つと、驚いた部下から当然のごとく注意を受ける。

「おう、久しいな創作！元気にやってたか？」

「・・・霸天!?!、たしかお前、満州でアカの軍団と殴りあって行方不明だったはず・・・」

「俺がアカの攻撃ごときの障害で死ぬ野郎だと思ってたか？」

そして創作の目の前に表れた男こそ、陸軍大佐の天ヶ瀬 霸天（あまがせ はてん）であった。

「いや・・・前の待避兵がソ連軍に新型の重戦車があったって言ったから・・・」

「IS―2とKV―2の事か？あんな柔な戦闘車輛は正面装甲を拳でブチ抜いてやったわ！」

「・・・相変わらず怖えなオイ、重戦車の正面装甲を拳でブチ抜くとかどうやるんだよwww」

「まあ、怒りに任せて戦車の主砲塔へし折ったり地雷を手裏剣の如く回転させて投げたりしたからな。」

「ワーオ・・・」

有り体に言えば人外との会話のように思える話だが、普通に対応できる創作の方も、なんだかんだ言って超人である。

実のところを言えば、葛城の最後の輸送経路として中国ルートが取

られたのは、だいたいこの覇天のせいだといっても差し支えない。

終戦一步手前の頃、史実通りにソビエトが日本に宣戦、満州侵攻が始まったわけなのだが、この時満ソ国境に防衛用の大隊にて指揮官を努めていた彼が居たのが運の尽き、前線に凸つてきた彼にフルボッコにされたのである。

この時、彼は部下含めて他の部隊人員などを中国方面に逃がしたのだが、その後の所業が恐ろしいものであった。

・・・その所業については要約すれば「政治将校血祭り」「督戦隊皆殺し」「ソビエト満州侵攻断念」で簡単に言えるのだが、バツサリ言つて覇天は人外である。

「つと、故郷に帰還か？」

「だな、戦争は終わったんだ、しばらくは平和へ向け前進することになるだろうさ。」

「あくあ、それにしたって敗戦かあ、創作、海さんの方は大丈夫なのか？」

「いやいや、長門、酒匂とかは接收、他は賠償艦、損壊艦は殆どスクラップだ。」

「大丈夫かソレ!?!、最悪海軍はブラウンウォーター・ネイビーにならないかソレ?！」

「……………事態はもっと悪い、いかんせんこのままだと日本から名実ともに軍隊が消えかねんからな。」

「はあ!?!どう言うことだ!?!」

「・・・なんでも、アメ野郎は日本を平和主義国家にすり替えるつもりらしい、その第一段階にて、ウチらから軍隊をなくして平和主義アピールさせるんだとよ。」

「バカか星条旗集団は!?!回りから攻めたい放題じゃねえか!!日本を植民地にする気か奴等は!?!」

「大方そんな感じだろ、まあ、アメリカの考えは失敗に終わるだろうがな。」

「・・・まあ、だろうな、英国の例を見ても植民地経営は余程の事が無い限り、もう時代遅れだ、そして何より・・・一時期とはいえ、俺らはアメリカから勝利を手にすることが出来た。」

「ビルマやベトナムの戦士達は、よくも悪くもウチの軍に鍛えられたんだ、ついでにアメリカはこの戦いで絶対的な強者であると言うイメージが崩れ、名譽的に最大級のダメージが入った・・・後は革命の嵐が吹くだけだ。」

「だな・・・後20年もしたらアメリカの強さは意味を成さなくなってるかもな。」

「そうだと良いがな・・・、オーイ!そろそろ出航するぞ〜!」

長話に花を咲かせてしまったが、そろそろ出港の時間だ。

葛城による最期の復員輸送が始まる・・・。

・・・とそんなことをしみじみ思っていた創作は最後に乗り込んだ

4人組が急に目についた。

「ん？、華人と・・・子供が二人に・・・西洋人・・・？？」

最後に入った四人組、フードを被っていて詳しくはわからないが、一人は華人、二人は背の低い子供、そして一人は紫髪の少女のようにみえたのであった。

「・・・見えたか？今の。」

「見えた、気になるしちよつと見に行くか。」

男二人は、先ほど中に入っていった四人組の事を確認するため、艦内へと向かっていく。

「……………いたいた、彼処だ」

「艦長室手前の隅っこ、見辛い所に陣取ってるか・・・益々怪しいな」

覇天と創作、この二人が四人組を見つけた所は、他の人が居ない艦長室手前の通路隅っこの方であった。

また、四人組が身を寄せあつて一ヶ所に固まり、見つかり辛くしているのが余計に気になった、と言うのもあった。

「失礼する、本艦艦長のものですが、そちらのお嬢ちゃん髪の色からして西洋のお方と見受けられますが、どちらへ向かう予定で本艦を利用なされたのですか？」

創作は気になったことをそのまま華人と思われる人に聞いてみる
こととした。

創作は葛城の艦長であるが故に、この航海の目的地が一番近い佐世
保でなく、横須賀であることを知っているための質問であるが．．．

「目的地である佐世保に、私の知り合いがいます．．．．．そのた
めです。」

．．．コレで創作は確信することとなる、

「そうでしたか．．．．．失礼するツ!!」

フードの人物達が只者でないと直感した創作は、四人を覆うフード
を咄嗟の手早さで剥ぐことにし、成功したのである。

「めーりーん……」

「お姉さま……（フルフル）」

．．．が、フードがなくなり見えてきたのは、赤髪で中国の武闘家
と思われる服装の女性、ボロボロの服を着た紫ロングヘアの少女、
青がかかっているのであろう銀色の少し長めの髪（恐らくセミロング
では無かろうか?と創作は見ている）そして何より分かりやすい蝙蝠
の羽が背中についている10歳前後と思われる少女と、蝙蝠羽のこと
同じくらいの身長で、黄色に近い金髪のサイドテールで、細長く、綺
麗に並ぶように虹の色をした水晶とおぼしきものがついた羽をもつ
少女。

「．．．どうするの?美鈴、気付かれちゃったわよ?」

「お嬢様、パチユリー様、私の後ろにいてください。」（コレは覚悟を決めますか……）

「あばばばばばb b b b」

「……………覇天！困惑しないで彼女たちを艦長室へ！大急ぎだ！」

「はっ！（。ロ。）、お嬢ちゃん達！、急いで此方へ来い！！」

「……………美鈴、どうする？」

「一応逃走を考えた方がよろしいかと。」

「逃走できる状況じゃねーから！！ああもうめんどくせえ！さっさと此方へ来い！！」

「え？わーっ！わーっ！」

姿を視認した覇天は二人の少女が恐らくどのような存在なのかを即座に察し創作は二人の異様な姿に動じることさえなく彼女たちを艦長室へと連れていこうとする。

覇天が気を取り直して連れていこうとするが、四人はオロオロするだけで何もしようとしない。

業を煮やした覇天は、四人を平然と持ち上げると、創作と共に艦長室へと連れて行かれるのであった。

だが、この時はまだ誰も知る由が無かった。

この時の出会いは、後々彼らを待っている幻想郷での大冒険の旅路の盛大な始まりでしか無かった事を。

そして創作達が人知れず戦い続けてきた存在との戦いに、幻想郷旅先を巻き込む事になろうとは……………

く幻想蒼日記く1945/8/15、1946/5/
10/7/15の記述く

1945年

8/15

今日、漸く祖国と米国が繰り広げた戦争は、陛下の放送でもって終わることとなった。数えきれぬ犠牲者を出したこの戦いは、ついに終わりの時を迎えたのだ。

もう敵の空襲に怯える日々も、敵潜への警戒に神経を使う必要も、私が鍛えたパイロット達が海の藻屑となり逝くのを見送る事も、みんなみんな全て、無くなった。

何だかんで幼い頃から欠かさず残してきたこの日記は、今日この記述でもって記念すべき50枚目へと移行する、だが、この事は戦争が終わった事による安心感と、祖国は戦争に負けたと言う事実に対する悔しさとが混じり、私にとって複雑な心境を生むものであった。

戦争が終わったことに対する地元の人々の反応は様々だった。

《お国のため》と、一端の海軍軍人でしかない私にできえ、理解できるほどの血のにじむ思いをしたのに、それが全て無駄となったと気づき、「夫の死はなんだったのだ、息子の死は何のためにあったのだ」と悲しむもの。

「まだ我が国は戦える！それなのになぜ！」と降伏を決めた国への怒りを露にするもの。

そして、自分にとっての地獄の日々が終わり、安堵するもの。

さて、戦争が終わったのだし、直ぐにでも大陸にいる兵士達の復員輸送が始まるだろう。

私も何だかんだで葛城の艦長だ、余り時間の経たない内に私へ復員輸送作業への従事が命令されると思っている。

或いは戦犯として裁判か何かで殺されるくらいか？

まあ、少し前に取り敢えず自宅待機を命ぜられたが、夜遅いし、取り敢えず今日は艦で寝過ごして、明日、愛する妻の元へと還るとしよう。

(ページ下部に破損した葛城甲板上にて寝転がる創作と思われる男の写真が挟まれている。)

――《中略》――

1946年

5/10

いよいよもって帝国海軍の大型軍船による復員輸送も終わりの時が近づいてきた。

あの戦いからだいたい一年、最初、ボロボロの自国海軍で復員とか無理だろ、と私は思っていたが、どうやらアメリカが復員のために輸送艦を応援に出してくれた模様、9年前に観光した時よりも開いていた祖国との差の余りの酷さに愕然とする。

話を戻すが、私と乗艦「葛城」はこの日、朝鮮からの復員輸送のルートを担当することとなった。

なんでも、終戦のどさくさに紛れてソビエトが進軍してきたのだが、満州にいた守備隊の一部が奮闘したことによりロクに進軍できず、その間に逃げてきた人が多いのだとか。

そういえば国境の方に覇天の奴が出張っていた筈。

無事にしてるかなあ？

6 / 15

きょうの復員受け入れの時、覇天の部下が相当数、此処にやって来た。

話を聞くと、覇天の奴、「自分一人でコイツらを押さえるからお前らは先に本国へ帰還しろ」と格好つけ、単独でソ連軍に突撃したのと、何やってんだか。

それと退却途中、アイツのいる方向へ二種類の巨大な戦車が群れを成して向かって行ったらしい。

だが結局、アイツの生死を知る者は居なかった。

少なくとも銃弾ごときで死ぬようなタマじやねえが……。

まあ、正確な情報が出てくるまで待つしかないか……。

7 / 15

うん、非常事態だ、余りにも大きな非常事態だ。

今日は特に大きな出来事が二つあった、まあお陰さまで、今日は九年前のアメリカ観光の時以上に胃を痛めることになったのだが。

一つ目は覇天の帰還だ。

アイツ、やつぱりと言うかなんと言うか、まるで何事もなかったようにヘラヘラしながら帰って来たのだ。

まあ、戦車の装甲を素手でぶち抜いたとか聞くことになった以外は、特にすさまじさを感じる事は無かった、まあ《あの日々》にいやと言うほど見てるからなのだろうが。

そして二つ目。

こちらの方こそ私にとっては重要なことである。

……《吸血鬼》の姉妹と出会うこととなった。

有り得ないとか叫びたかったが、あいにく私は何種類もの《吸血鬼》とであつた経験がある。

(但し、俗に言う《吸血鬼》とは程遠いのばかりであるが。)

そんなわけで姉妹の少女達をざっと観察すると、いかにも「武」を極めている雰囲気とする華人と思われる女性と、ヨーロッパから来たと思われる紫髪の少女とが一緒であつた。

葛城に乗つてきたその姉妹達だが、どう鼻眞目に見ても幼い、とりあえず付き添いと思われる紫髪の少女の体調が悪そうに見えたので、取り敢えずこっそり艦長室に連れていくことにした。

覇天が居合わせたが特に問題なかつたことを記しておく。
彼女達から名を聞いた。

……が……の……であ……

(以降、文字がかすれて読めず、後数行の所で最後のページが終了しているため、次の冊に跨がっているのかどうかすら解らない。)

(が、しかし、このページ冒頭に撮影日時不明な写真があり、そこに蝙蝠の羽が背中にある10歳手前ぐらいの少女と、ぶら下がるひし形の水晶と思われる物体が付いた枝のような、恐らく羽とおぼしき物が背中にある前者よりも更に幼く見える少女の姿がある。)

……以上が今回の調査にて発見された、創作氏の日記の続きである。

しかしながら、現状では1941年より前と、この日以降のことを

記した本冊子の系列は未だに発見されていない。

1943年の日記に残されていた《異様な写真》の件から始まった彼の前半生を辿る本調査は、1946年7月15日の手記と。「彼の身に歩んだ道は、常人と余りにもかけ離れたものである」と言う事が大方予想できる範囲に至る事となった。

本調査の結果、これまでの調査の結果にて、彼が秘蔵していた資料などから、間接的にナチスがオカルトに傾倒した理由に《人類とは別のベクトルで恐ろしい生命体》の存在の一端が見えた事と関連性があると本調査チームは確信し。

創作氏の前半生において、彼の身に何が起きているのか、更なる調査が必要であると判断し、更なる追加調査を要請することで、今回の調査報告の締めくくりとする。

日米両歴史学会公認。

2008年8月15日発表、

アメリカ、ミスカトニック大学と、日本、内亞螺大学共同研究チーム著。

第7回「蒼井創作の（謎）に関する調査報告」第三項、《残された手記について》より。

（原文訳、一部抜粋）

↳ 「葛城」 艦上、小さくて大きい真実達↳

↳ 「葛城」 出港数分後、「葛城」 艦長室↳

「……どうだい、甘いもん食ったら少しは落ち着いたか？」

「……. うん。」

「(モキユモキユ)、甘くて美味しいわね、」

「さてと、こちとら色々聞きたい事があるのだが」

「私がお答えしましょう、お答えできる範囲での話にはなりますが。」

あれから暫くが経ち、創作は艦内に置いていた羊羹を少女達に渡して少女達の名前を聞き出したり、不審に思っってやって来た部下から状況を何とか誤魔化したりなど忙しくなっていたが、それらが落ち着いたので創作と覇天による聞き取りが始まる。

「しかし何処まで話していいものでしょうかね、」

「此方としては俺が聞くことは大方教えてほしい所だなあ。」

「……といわれましてもねえ」

しかしながら、やはり状況が状況だからか、創作達はあまり信用されておらず、このままだどこの華人(?)、紅 美鈴(ホン・メイリン)からは重要な話は聞けそうにない。

それに少女達の方もなんの理由か服装がボロボロなため、話をするために長時間直視するのは精神的に来るものがあり、そんなわけで、創作は此方の方からアクションを起こすことにした。

創作が何故か視線を少女達の頭上に合わせたと同時に、何も無いそこからいきなり幾つかの服が姿を現す。

「わっわっ！何これ！って服が!？」

「これは・・・いったい????」

「Oh・・・創作お前・・・」

いきなり降ってきた服に大困惑する三人の少女と美鈴、何が起こったのか即座に察したのか呆れ顔で創作を見つめる覇天。

「これは・・・」

「私が【知っているもの】、想像できるもの、そんなところなら条件付でポン出し出来るっただけだ、お陰さんでこの時代にや珍しく、飯と着る物で困った事は一度も無い身でね。」

「まあ秘密にしといてくれよ？艦内の何人かは知ってて黙ってくれてる奴もいるし、何よりバレたら後々面倒ってレベルじゃねえからな。」

「創作さん、あなたはなんでこれを・・・」

美鈴は「何故その異質さを戦争に利用しようとしなかったのか、そうすればこの戦争の結末はひっくり返っていたのかもしれないの。」と続けようとしてその言葉を飲み込んだ。

その時創作のしていた寂しげな目は、この時、美鈴が飲み込んだ言葉に対しての返答が籠っていたのだ、何かを察した美鈴は特に言うわ

けでもなくその場で沈黙することとなった。

「創作・・・大丈夫なのか？」

「美鈴さん達もまた異質なんだ、気にする要素はねえだろ。」

「羽根の少女・・・レミアとフランドールだっけ？その二人の嬢ちゃんならともかく、美鈴さんとパチュリーの嬢ちゃんはただのパンピー（一般人）だぞ？」

「覇天・・・その二人に探りいれてみた？」

「いや？全く。」

「なーんも予測立てて無いんかい、まあこれは簡単な予測なんだが、あの嬢ちゃん・・・パチュリーちゃんは恐らくレミア、フランドールの二人と長い付き合いなんだろう、友達とかそんな感じだろうな。」

「いやそれは前提話だろう、あの二人が吸血鬼じみた姿をしているなんて事実を一緒に隠していたんだからな。」

「それもそうか」

（・・・にしても、そもそもなんでこの子達なんでわざわざ日本に、そしてどうやってあんな状況でやって来たのだ？）

美鈴達を置いてけにする痛恨のミスをやらかしながら覇天と創作は話を進めるのだが、ここで、いつのまにか羊羹を食べ終えていた紫髪の少女・・・パチュリーが二人に対しての突然口を開き始めた。

「・・・・・・・・蒼井さん、天ヶ瀬さん、見てほしいものがあるの。」

「？」

「え．．．パチュリー、アレ本当に見せちゃうの？」

「多分、見せても大丈夫だと思う．．．」

「でもそれがあつたからパチエは居場所を．．．」

「覚悟は出来てる。」

「????」

余程見せるのに抵抗有るものだからなのか、見せようとするパチュリーを制止するレミリア、フランドールはまだ羊羹に食いついているため気づいていないが、二人の目が潤んでいるのがわかる。

「．．．．．パチュリー様、宜しいのですね？私としてもそれをお見せするのは止された方が宜しいかと思うのですが．．．．．」

「良いのよ美鈴、この二人がどのような反応をしても、貴方とレミィ、それにフランもいるしね。」

「パチュリー様．．．．．」

（え？そんなヤバイもん俺らに見せようとしてるの？もしかしてポーランドとか欧州のお偉いさん関係？）

「．．．．．これを見てくれないかしら？」

「!!」

話の後、懐からなにかを取り出したパチユリーはすぐさまそれを二人に見せるのだが、見せられた物に対し二人は絶句する。

「なあ……創作、これお前の友人の……それにそっちのも……これって。」

「……千畝……まさかな……こんな形で見るとは……アイツの……無駄ではなかったんだな。」

ソレを見た覇天は短く呟いた後絶句し、創作は見た瞬間察した、何故に、どうやって？、その流れの殆どすべてをである。

ソレ、とは、黄色い六芒星のバッジ、
ソレ、とはたった3つのボロボロのパスポート。
ただ、ソレ、は少女が持つにはあまりにも重たい出来事があり。
ソレはその出来事から逃れた証のような物。

そう、

「シオンの星……」

「カウナス・パスポート……」。

この日、後に「命のビザ」と呼ばれる事となる数千のパスポート達のうちの一つと、後に「ダビデの星」と呼ばれることとなる一つのバツジが、二人の男に渡った。

そして、物語は基点へと向かう……